

# When I was young



当時所属していた東京大学管弦楽団のメンバーと。向かって右から3人目が、大岩元先生。

大山元

教壇で、魅力ある講義をしているあの教員は、どんな人なのだろう。

学生が教員と接触する機会は、そうたびたびあるわけではない。

しかし、そんな教員にも若かりし頃、学生だった時代があった。

どのような学生時代をすごしたのか。当時の経験がその後の人生にどのような影響を与えたのか。

この連載では、学生時代の体験を中心に、教員たちの人生のターニングポイントを探る。

連載第21回の今回は、大岩元環境情報学部教授に話を聞いた。

## 東京大学理学部に進むまで

僕の通っていた日比谷高校は、先生方は非常に教育熱心で、授業が面白かった。100分授業で、グループワークをやったり、海外の小説を原書で読んだりして、自分の頭で考えることが多かつたね。今のSFCと同じような感じ。だから、東大に入るとみんな「高校の方が面白かった」とがっかりするくらい。

専攻を物理学に決めたきっかけは、「物理学者とは、人とちゃんと話すことなく、自然を対象にじっくり考えればいい職業だ」というノーベル賞を受賞された湯川秀樹さんの言葉でした。人とうまく協調することが苦手だった僕にとってはとても魅力的な言葉だったわけですね。というのも、僕の両親はクリスチヤンで、西欧的な考え方を良しとしていたんです。つまり、ちゃんと自己主張をする。だから僕は他人とぶつかり合うことを避ける日本人とは、折り合いが悪かつたんです。それで、自然を対象とする物理の道を選ぶことにしました。大学入学後、1年半の教養課程を経て理学部物理学科に進学しましたが、それは本当に偶然です。当時の物理学科というのは敷居が高かったです。そこで、成績順で2桁以内だら理学部物理、3桁だったら工学部の物理工学と決めていたら、僕はなんと99位だったんです。ぎりぎりで、物理学科に進学することになりました。

## コンピュータと共に歩んできた道

現在、僕の研究分野は主に情報教育学です。コンピュータに携わろうと決めたのは、物理学科に進学した後でした。ぎりぎりで物理学科に進んだこともあって、学科内では完全に落ちこぼれてしまったんです。納得しないと先に進めない僕にとって、難しいことを次から次へと

学ぶ物理学科の教育には、全然ついていけなかつた。一方コンピュータの分野といえば理解すべき仕組みはとても簡単で、あとは工夫したんです。

日本における情報分野の問題点に、コンピュータの研究を進めるなかで気づきました。日本の情報産業は、道具を作ること自体あまり興味がない。道具を使ってどう儲けるかということに目がいつてしまっているんですね。情報産業の基幹となるハードウェアやソフトウェアなどの多くを海外から買っていますし、買ってきたものを日本人が使えるように再開発するのも、今後はベトナムや中国、インドにとって代わられるでしょう。日本人は、きちんと道具作りを勉強しないといけない。まずは自分で一通り作ってみたうえで、うまくできない部分を他に頼るというのはないと思うんです。でも日本では、最初から他の技術者に頼ったり、お金で解決したりしてしまっているのが現状です。

その点、僕が当時所属していた後藤研究室は違いました。研究室の後藤英一先生の教育方針は、「まずは自分でやる」というもの。秋葉原で部品を全部揃えて、今のテレビのようなものを自分で作つたりもしましたね。博士論文でも、設計理論を作るだけではなくて、その設計をもとに実際に装置が作れるか、そして動かせるかどうか試すところまでやりました。お金で買えばすぐにできるようなことも、まずは自分でやってみる。非常に時間がかかる大変な作業だけれども、自分の頭と手を使って「から作る」と、意義をしつかりと見出している先生だったんですね。その先生の意を受けついで、現在でも僕は「まずは自分でやることを心に留めています。そしてこのことは、今後の日本情報産業にも必要なことだと思っています。

## 日本の教育について思うこと

情報教育学の研究者ですから、もちろん教育のことも考えます。教育においても、「自分でやる」ことが必要だと僕は思っています。まずは計算力など基礎的なことを訓練する。その後は創意工夫でやらなければいけない。日本の教育って、基礎的な教育ですべてを済ませようとしていて、片付かないところはお金で解決しようとしている。それが日本をおかしくさせているね。

先ほど述べましたが、僕は大学の授業よりも高校の授業の方が格段に面白かったと感じています。その原因は、日本の大学教育が機械や装置ばかりにお金をつぎこんでいて、学生にあまり投資していないという点にあります。日本の一 流大学というのは、僕に言わせれば研究論文を一生懸命書いてばかりいる大学。予算を使って装置を他から買ってきて、それをもとに、また次の資金をもらえるような論文を書くんです。もちろん、それで研究成果は出るけれども、一流の研究は生まれないし、学生が育たない。自分で一から考えて、研究テーマやものを創りあげる力がつくよう教育することがもつと必要なんですね。

人間に投資するということを、僕は「キー ボードによる日本語入力」の開発において実践しました。ローマ字入力は、実は日本人の脳にすごい負担がかかっているんです。そこで、キーボード入力をもっと楽にやろう、ということでこれを開発しました。普通のローマ字入力とは異なって変換しないで漢字を入力しますが、30時間も練習すれば、誰もがほぼできるようになります。慣れてしまえばローマ字変換より楽なんですが、その30時間が面倒だといってみんなやらない。人間に投資するという風潮がないのが、やっぱり問題ですね。

## 音楽が気づかせてくれたもの

大学時代は、東京大学管弦楽団で音楽活動を熱心にやっていました。フルートの名奏者である林りり子先生のもとで、フルートをやっていたんです。大学時代の思い出といえば、勉強よりも音楽。音楽で飯を食つていこうか、と真剣に悩んだくらい。物理は全然ダメだったけど、音楽は非常に面白かったですね。

当時はプロとアマチュアの境目が今ほどはつきしていなくて、学生がスタジオミュージシャンを務める」ともあった時代。僕のまわりにも、学生時代に音楽活動をして、そのままプロになつた人もいましたよ。僕はといえば、本番に弱かつたというのもあって、その道はあきらめましたが、音楽はとにかく一生懸命やりましたね。

なかでも一番思い出に残つているのは、大学院2年の時に行ったドイツ・オーストリアへの演奏旅行です。ヨーロッパに行くこと自体が珍しかった時代に、ちゃんと学生を組織して実際に行くという勢いが、当時の東大オーケストラにはありましたね。向こうでは音楽への認識が日本とは全然違う。これは驚きました。音楽は聴衆が作るという感じなんです。演奏が良ければ何度もアコールを要求する一方で、演奏が悪いとさっさと帰ってしまう。聴衆も一緒にになって演奏会を作っているんです。僕たちの楽団が演奏をしたなかで一番評判が良かったのは、八木節でしたね。実は技術的にはかなり練習不足だったんだけれど、日本人の体に染み付いているものを演奏すると、非常にアピール力があるんだということが分かつた、面白い思い出です。

最終的に、僕は音楽の道には進まなかつたけど、音楽からはさまざまなことを学びました。キーボードの日本語入力ソフトウェアと同じく、音楽も慣れてしまえば楽なんです。練習し

てできるようになつたら楽しい。これは、僕が音楽を通して実感していることなんです。また、「まずは自分でやる」ということも、音楽を通じて学んだ部分が大きいですね。オーケストラにおいては、他のメンバーとの協調性も必要だけれど、自分の役割をきちんと果たし自分で責任を持たなければいけない。誰も手伝ってはくれないんです。こういった人間と社会とのあり方を学ぶことができました。

日本の情報産業や教育に携わっている人たち、そしてSFCに通う皆さんにはぜひ、「まずは自分でやる」ということを意識し、実践してほしいと思います。



## 大岩 元

(おおいわ・はじめ)

環境情報学部教授兼政策・メディア研究科委員。東京大学理学部助手。豊橋技術大学教授を経て、現職。東京大学理学部物理学科卒業後、同大学院理学系研究科修士課程、博士課程修了。理学博士。専門は情報教育学、ソフトウェア工学、認知工学。主な担当科目は「データ構造とプログラミング」や、「情報教育論」など。2006年度春学期は、「メッセージを伝える教育」と文部科学省の「現代GP」に採択された「コラボレイティブ・マネジメント型情報教育」というテーマで研究プロジェクトを展開した。

# Communication & Network ～未来をつくる卒業生たち～ *Co-net*



## 第19回 杉山雄一さん

株式会社シフト代表取締役 1996年 環境情報学部卒業  
1998年度 政策・メディア研究科修士課程修了 同年 有限会社シフト設立(現在は株式会社)

### ゲームという名のメディア

かつて「未来からの留学生」としてSFCで学んだ学生たちが、いま実際に未来を創り始めている。彼らはSFCで何を学んでいたのだろう? 現在はどんな職業についているのだろう? この企画では、卒業生に社会での奮闘の様子を聞くとともに、今後社会にはばたこうとする現役SFC生へのアドバイスを求める。

今回は政策・メディア研究科3期生で、株式会社シフト代表取締役の杉山雄一さんにインタビューした。

学生から企業家へ

――SFCでの学生時代、どんな勉強をされていたのですか?

プログラミング系の授業を、多く履修していました。なかでもいちばん興味を持ったのは、LISPという年代物のプログラミング言語でした。LISPは表現力と柔軟性が高く、人工知能の分野ではなくてはならない言語です。また、LISPでのプログラミングは簡単で面白いので、初心者でも比較的簡単にプログラムが作れるようになります。この言語によって、私はプログラミングの世界に引き込まれたのです。現在主流のJavaは、私の大学生時代に始めたばかりでした。当時はさまざまなプログラミング言語が生まれつつあったので、プログラミングの世界が大きく変わり、いすれは世の中全体も大きく変わるかもしれない、という雰囲気がありました。

研究会は、富田勝研究会に入っていました。現在、環境情報学部長の富田教授はバイオインフォマティクスの研究をされていますが、私が研究会に入った時には人工知能の研究をしていました。その前は、自然言語の処理に関する研究をなっていました。研究会では「魚の群れ」を表現するためのプログラミングをしたりもしました。

――ミリオンセラーとなつた『X[saɪ]』(注1)を作つたきっかけを教えてください。

大学院生のとき、研究会メンバーひとりがSCEI(注2)主催の「ゲームや

ろうぜ!」というゲームクリエイター発掘オーディションに合格しました。そこで富田研の仲間5、6人でチームを組み、さっそく製作を始めました。このチームが、現在私が経営する(株)シフトの原型です。

このオーディションはSCEIから制作費や機材の融資を受け、3年以内にブレイクダウン用のゲームを作るプロジェクトでした。しかし、最初の1年は良いアイデアが浮かばず全く進展しなかつたんです。そんな停滞期のあるとき、ディレクターさんに持参した企画書2枚のうちの第二候補が彼の目に留りました。それが『X[saɪ]』だったのです。こうして2年目から、ようやく製作段階に入りました。当時は、不思議といいものができるという確信がありました。苦しかった1年目とは打って変わって、楽しく製作していました。当時は、不思議といいものができるとの感覚を覚えていました。その結果、1998年に『X[saɪ]』が100万本売れ、1999年の政策・メディア研究科修士課程修了と同時に、現在の会社を立ち上げました。

作品を作る

――現在、会社でどんな役割をされているのでしょうか?

会社創立当初は、私自身もプログラマーとして働いていましたが、今ではもっぱらプランナー兼マネージャーです。企画を提案しそれを、社員をマネジメントすることで膨らませる。無から有を生み出し、それを何倍にもする、とでも言いましょ

うか。

社会では、クリエイターが作りたいと考えている作品とクリエイントから求められる作品は必ずしも一致しません。社員にはやりたいことを自由にやらせてあげたいのですが、クリエイントの要求に応えるためにやらなければならないこともあります。そこで、マネージャーとして一番気を付けていなughtは、クリエイターのモチベーションを上げ、持続させることです。どんなクリエイターでも、大体同じレベルの作品は作れます。しかし、それを超える作品を製作するためには、プログラミングに加え、インターフェイス等、あと一步最後の詰めまで気を抜かないことが重要だからです。

また、近年の作品は高度になり、大人數が製作に関わるようになってしましました。そのため、仕事を専門化し、チーム単位でゲームを製作します。たとえば、グラフィックのチームはグラフィックだけ、アニメーションのチームはアニメーションだけ、といった具合です。しかし、完全に專業化されたオフィスから「売れる商品」は生まれません。風通しのよいオフィスを作ることも、また私の仕事です。完全に專業化しないよう、誰が何をやっているのかを、双方から見ることのできる職場環境を目指しています。

——停滯期に『XI[sai]』が生まれたと伺いましたが、スランプを克服するために、どんなことをするのですか？

何かに行き詰ると「移動する」ようにしています。旅行に行くわけではないです



## やはり、『XI[sai]』を超える

作品を作りたいですね。

——これから、どのような作品を作りたいと考えていますか？

やはり、『XI[sai]』を超える作品を作りたいですね。私は「ゲームは人と人との繋ぐメディアだ」という信念を持っていました。特定の世代の人だけが熱狂的になるような作品ではなく、全世代に愛される作品を目指しているのです。皆でワイワイやって、ゲームそのものが楽しい以上に、ゲームをすることで家族や友人と一緒にいることが楽しくなるような、そういうゲーム作品を目指しています。『わゆむ』、接待ゲームです。あと、インターネット・ゲムへの参入も視野に入っています。

SFCにいたから、私は今SFCにいる

——最後に、SFC生へメッセージをお願いします。

大企業や公務員などある意味手堅い就職先を選ぶ学生が多い中で、少ないかもしれませんのが、自分で何か会社をやる

が、電車に乗りたり、飛行機に乗ったりします。しかし、頭の隅にはその問題を忍ばせておく。そうすると、フツと解決方法が湧いてくる瞬間があるんですよ。行き詰つてらるところとは、袋小路に追い込まれているということなので、外からの刺激、視点が必要です。あることだけに集中してしまうと、上手くいかないもののなかで、問題を考え抜いたら、視点をその問題から少し外してみることが大切です。

うと思つてらる學生には「今からもう始まつてらる」という意識を持つていてほしいです。大学を出でからではなく、実はもうすでに今が起業の準備段階である、と伝えたいです。将来、一緒に仕事をするかもしれないユニークな仲間を見つける準備。研究会やサークルなどで、自分の適性を見つけ、将来何をやりたいのかを見きわめる準備。大学時代、みなさんにはこの二つの準備をぜひ進めてもらいたいですね。

(注1)『XI[sai]』

ソニー・ハドヨウタエンタテインメントのパズルゲーム。小悪魔のキャラクター「アクリ(ACRICO)」を操作し、ステージ上に次々と現れるサイコロを操作して消していくアクションパズルゲームである。

現在まだ日本本の統編・関連作品が出ており、PSPや携帯アプリでも楽しむことができる。

(注2)の〇〇一

Sony Computer Entertainment Inc.



(C) Sony Computer Entertainment Inc.

# PROJECT in SFC

## POM<sup>2</sup>

SFC生が立ち上げたプロジェクトとその達成に向けて挑戦し続ける学生たちの活動を伝えていく「PROJECT in SFC」。第二回目となる今回は、Problem Of Mines is Problem Of Mineの理念のもと、ステッカー販売を通して地雷問題の解決に取り組むPOM<sup>2</sup>を紹介する。POM<sup>2</sup>設立時の代表を務めた田中清隆さん(政策・メディア研究科修士課程1年)に話を聞いた。

地雷原を示す赤い看板 "Danger!! Mines!!"。爆破処理の際に響く、空気を裂くような凄まじい音。そこに、地雷原は確かに存在していた。「地雷の恐ろしさを身をもって理解した。地雷は絶対にあつてはならない」。タイの地雷原を訪れたPOM<sup>2</sup>創設者の田中清隆さんはそのように語った。POM<sup>2</sup>は「日本に住む人達と地雷問題との新しい関係づくりを考えよう」という主旨のもと、2003年に結成されたプロジェクトだ。主な活動はステッカー販売による地雷除去のためのファンドレーニング(資金調達)と地雷問題に関する情報発信である。ステッカーの販売によって得た利益はすべて「特定非営利活動法人 人道目的の地雷除去支援の会」(通称JAHDS)の地雷除去プロジェクトへ寄付される。また、現在では「ソシオプロジェクト事務局」の一環として、学生のみならず企業やNPOとの協働を行なっている。

POM<sup>2</sup>のプロジェクトの仕組みは至ってシンプルだ。その根幹を成すのが一枚300円のステッカーであり、これを購入

する」とが、地雷除去への参加へつながるのだ。この金額はタイの地雷原1m<sup>2</sup>の地雷除去費用に相当する。ステッカーの一枚一枚にはナンバーが記され、ホームページ上の地雷原マップに示されたナンバーとリンクしている。したがって、ステッカーの番号と現地の地雷原の番号とを照らし合わせることで、購入者は自分がどの土地の地雷を除去する費用を出したのかを知ることが出来る。さらに、ステッカーを目立つ場所に貼れば、他の人に活動を伝えるメディアにもなる。

2003年の夏に、田中さんはSFCで開講されている「非営利組織インターネットシップ」の授業の一環で、地雷除去を行なうNGO団体「JAHDS」のインターンシップに参加した。それがきっかけとなり、タイの地雷除去現場へ足を運ぶ機会を得た。大地に響き渡る地雷の爆破処理音を聞いて、田中さんは地雷の恐ろしさを体感したという。「それまで自分とは遠い問題として捉えていた地雷問題を、はじめて身近なものとして考えるようになった」。そして帰国後、何とかしなければという思いから地雷問題に関わ

るのだ。この金額はタイの地雷原1m<sup>2</sup>の地雷除去費用に相当する。ステッカーの一枚一枚にはナンバーが記され、ホームページ上の地雷原マップに示されたナンバーとリンクしている。したがって、ステッカーの番号と現地の地雷原の番号とを照らし合わせることで、購入者は自分がどの土地の地雷を除去する費用を出したのかを知ることが出来る。さらに、ステッカーを目立つ場所に貼れば、他の人に活動を伝えるメディアにもなる。

る」とを決意した。その後、「生活者の社会参加」というSFCの授業のグループワークにおいて、田中さんは地雷問題に対する新しい参加の選択肢づくりを提案する。その意思に賛同した8人によりPOM<sup>2</sup>の活動が始まった。

誰もが手軽に参加できるものであることを、参加者が「取り組みを通して地雷への問題意識をしっかりと持てる」として、POM<sup>2</sup>の活動が始めた。このメンバーは話し合いを重ねるなかで、この二つの条件が参加の仕組みを作るにあたって重要であると気付いた。これらの条件を満たすものとして誕生したのがスレッカーブラウジングによる資金援助だった。「たしかに困難だつたけれども、一から何かを創りだすのは楽しかったし、僕たちは地雷問題に対し、また社会的な活動に対する素人だったからこそ、逆に自由な発想による参加の仕組みを考えることができたのだと思う」と、田中さんは当時を振り返る。

POM<sup>2</sup>の活動に共感している人たち



田中清隆(たなか・きよたか)  
2006年3月総合政策学部卒業。  
現在は政策・メディア研究科修士課程1年。「政策形成とソーシャル・イノベーション」プログラム所属。社会的課題に挑むための「仕組みづくり」に関心があり、現在はNPOなどに融資を行なう市民金融制度について研究中。

はSFCの学内外を問わず、協働を行なっている。ステッカーの初代デザイナーは、デザイナー志望の学生が担当しなお、現在のステッカー・デザインはプロの「デザイナーからの無償提供によるもの」採用)、G-Sを用いた地雷マップの作成に携わったのは厳網林研究会メンバーだ。参加メンバーがそれぞれ得意分野を活かして協力することで、プロジェクトの構想は具体化されていった。また、愛知万博でJAHDS主催の市民ブースに参加したときには、POM<sup>2</sup>の理念に賛同したプロサックス奏者の小林洋平さんが、地雷原をイメージして作ったオリジナル曲を演奏してくれた。その愛知万博では一週間で千枚以上のステッカーを販売した。POM<sup>2</sup>の活動を知つて地雷問題に関する関心を深めた人々の思いを聞くことができ、「すごく広がりを感じる一週間だった」と田中さんは言つ。

プロジェクトリーダーとして、田中さんが気をつけてきたことがある。そもそもPOM<sup>2</sup>の活動は自分達の問題だ——「Problem Of Mine」(地雷問題は自分達の問題だ)——POM<sup>2</sup>の理念のすべてがここに集約されている。「地雷のすぐ近くで暮らしている人々の生活を自分たちは完璧に理解することはできない。けれども、彼らの生活を自分達の生活と一つつなぎを持つものとして捉えて、想像する。そして、その上で自分たちに何ができるかを考え、参加の仕組みを創造していく。この想像と創造という二つの要素が必要なのだと

な考え方や特技を持つメンバーが、持ち味を活かして最大限の活躍を出来るよう常に考えをオープンにできる環境を作ることだ。地雷除去という目標を共有しつつも、メンバーの間の異なる意見を無理に一つにまとめようとするのではなく、むしろ違いをオープンにすることだと何ん話し合う姿勢を堅持していく。ステッカーという、予想もしなかつたような新しい参加の仕組みも実はこうした人間関係の中から生まれてきたのだ。

"Problem Of Mines Is Problem Of

思う。そうする」といって、肩肘張つたものでも、その場限りの一過性のものでもない、あるべき社会参加の形が見えるのではないか」と田中さんは語る。

自分が問題だと思ったことを恥ずかしくらずに問い合わせ、問題との関係作りを通して、さまざまなバックグラウンドを持つ仲間と協働していく。そこから創造された、全く新しい問題解決の仕組みを社会に示していくことで、POM<sup>2</sup>は多くの人とつながり、今後も成長していく」ことだらう。

プロジェクト URL <http://www.jirai.org/>



## ■ラテンアメリカへの思い

——スペイン語を始めたきっかけを教えてください。

中学生のころからずっと、ラテンアメリカが大好きだったんですよ。特にラテンミュージックが好きで、歌詞の内容を知りたかった。それに私は遺跡にも興味があるって、ラテンアメリカにすごく行きたかった。そこで初步的なことだけですが、独学でスペイン語を始めたんです。やつてはいるうちに自分の知りたかうことがわかつてきて、スペイン語への興味はますます膨らんでいきました。あと、高校3年のときにAFSという、高校生の交換留学を主な活動としている民間団体の奨学金で、パナマ共和国に留学する機会に恵まれたんですよ。その留学がとても楽しかったので、大学でもスペイン語を絶対に履修しようと思っていました。

## ■スペイン語を通してラテンアメリカを見る

——大学ではどのようなスペイン語の授業を履修したのですか。

まずベーシックを履修し、その後インテンシブとスキル、コントンツを履修しました。毎学期2コマ以上履修しています。インテンシブの授業で最も面白かったのは、スペイン語のクラスCMを作成した授業ですね。語学の授業で撮

影や映像編集などといった方法を取り入れるところがとてもSFCらしいと思いました。また、私は今スペイン語の外研修に参加したり、留学したりした先輩の体験記も掲載されるので、履修している学生も親近感を持つことができると思います。スペイン語を履修する学生にはテキストをしっかりと活用してもらいたいですね。

スキルはベテランの先生方がスペイン語作文などをとても丁寧に教えてくれるので、楽しくそしてためになります。あと、先生のスペイン語にまつわる武勇伝を話してくれるのですが、これが授業よりも面白いくらいなんですよ(笑)。コンテンツではラテンアメリカの政治経済に関する知識をたくさん身につけることができましたね。語学以外の知的欲求を満たすには、ラテンアメリカを扱う比較文化Cの授業も役立ちました。スペイン語の授業はどうしてもスペイン語のスキルを磨くことが中心になってしまって、語学を学びたい、という意識を高める上でこの授業も面白かったです。コンテンツや比較文化の授業から得た知識は自分の研究にとても役立っています。

## ——今後スペイン語の授業に期待する

SFCで授業を履修するだけではなく、学んだ知識を外で活かすことも重要です。私は湘南台地域の外国籍児童の日本語学習をサポートするボランティアをやっていたのですが、そこで経験を通じ、語学に対しての自分なりの考え方を持つことができました。スペイン語は非常に人気があるので



インテンシブⅢクラスの同期のメンバー。

# 世界への扉 —SFC外国語教育の魅力

## 第2回 情熱を感じる

SFCでは、未知の世界へのパスポートとなる外国語を学ぶために、体系的なカリキュラム、確実にスキルを磨く独自の教材、多様な授業形式などが、学生の意欲的な学習を支えている。「世界への扉」では、外国语担当教員とSFCで外国语を学ぶ学生の双方に焦点を当て、言語を学ぶ意義と楽しさをお伝えする。第2回目はスペイン語をとりあげ、環境情報学部4年の中条真帆さんへのインタビューを通して、そのユニークな面白さに迫る。また、寺田裕子総合政策学部専任講師による寄稿も併せてお届けする。

が、需要に比べて供給が少ないのでもつと授業や研究会の幅が広がってくれたらしいと思っています。

でも、供給が少ないから「そ自分にとって良かった」ともあるんですね。私は大学に入ったころ、ラテンアメリカのことであればなんでもいいから学びたかった。けれど当時、それを学べる研究会はほとんどなかった。そこで、自分は何をすればいいのかって考えた時に、実は私は教育について学びたいんだって気づくことができたんですよ。そして教育を学ぶ手段の一つとして、スペイン語を学んだり、ラテン・アメリカの事例を研究すればいいんだと気づいた。語学はあくまでツールです。そのツールを学ぶ目的と混同してしまうと、自分が本当に何を研究するべきか、何をしたいのかを見失ってしまうと思うんですよね。教育やバイリンガリズムの勉強をして、それをラテン・アメリカに応用しようと思えたことは、とてもよかつたと思います。

### ■ 学び続けられた理由

「ずっとスペイン語を学び続ける」とができる理由は何だと思いますか。



海外研修(メキシコ)にて。右手前が中条さん。

(注)日本スペイン協会主催の全日本スペイン語弁論大会。中条さんはこの大会で朝日新聞社賞を受賞し、副賞としてメキシコInter Continental大学への奨学金を獲得。現在留学中。

「学ぶ」ことが面白いから続けられるという理由も当然あります。しかし、その言語が話されている地域にどうしても行きたいとか、その国の文化、人々など何かすごく情熱を感じるものがないと、どうしてもどこかでくじけてしまったとえば私にとてのラテン・アメリカジックのように、何でもいいから、すごく好きだというものがあつたら、絶対続けられると思います。ぜひ皆さんも熱い情熱を持って、言語を楽しく学んでください。

### スペイン語を学びたい皆さんへ

総合政策学部専任講師 寺田裕子

私はスペイン語に限らず語学が好きなんです。だから英語やフランス語も履修しましたが、スペイン語ほどは情熱を持つて勉強していません。この差がどこにあるかと問われたら、言語以外に、その言語圏への興味があるかどうかだと答えます。もちろんスペイン語

「スペイン語を学びたい」とクラスに来る人の関心は実に多様です。というのも、スペイン語は世界20カ国公用語で、アメリカでもスペイン語を母語とする人口が急増中だからです。世界の多くの地域で話される言語ですから、その結果、異なる学習の動機を持つ人が集まつて勉強を始めます。スペイン本国のガウディの建築・ピカソやゴヤの絵・フラメンコ・サッカー・歴史などに関心が集中する一方で、北米・中南米に関心のある人も多いです。アメリカでラティノに出会つた・サルサが好き・ブラジルやアルゼンチンのサッカーが好き・Juanesの歌を歌いたいなどでしょうか。スペイン語をツールとして自分の関心を深めています。ベーシックやインテンシブコースを終え、スペイン語の通訳・翻訳講座など、語学そのものをレベルアップしていく学生や、メキシコの経済事情・ペルーとの関係・南米の政治など専門科目をスペイン語で読んだり、議論したりする学生もいます。また、スペイン語スピーチコンテストに入賞し、スペインやメキシコへ奨学金をもらって留学する学生も毎年出ています。みなさんも、スペイン語やスペイン語圏のことに興味があれば、是非学んでみてください。将来が広がります。

# 私

の推薦図書として、松岡正剛  
監修、編集工学研究所構成、  
『情報の歴史』(NTT出版)

[1]をとりあげる。この本は最初から順に読むよりも、必要な場所を辞書のように引くように構成してある。ユニークな文化史年表である。

## 私の推薦図書

星の数ほどある書籍の中から、本当に価値ある本を見つけるのは容易なことではない。しかし誰にでも、忘れない深い感動を覚えたお気に入りの一冊が、きっとあるはずだ。この連載では、それぞれの道で活躍しているSFCの教員が、学生へのメッセージというかたちで、忘れぬ一冊を語り、「私の推薦図書」とする。今号に登場するのは有澤誠環境情報学部教授。推薦図書は松岡正剛監修『情報の歴史』である。

中学や高校時代の歴史年表は、政治史を主軸にして経済史を添えた形で構成してあった。文化史については、種々のエピソードを散りばめているものの、系統だった記述になっていた。だが本書は、文化史を情報という視点で整理した年表である。副題は、「象形文字から人工知能まで」となっている。文化史の中でも、科学技術史に重点を置いた内容である。

本書は、人類の文化の発生から現在までを、次のように七つに区分している。

- (1) 情報の記録: BC 6000 年 - BC 600 年、
- (2) 情報の分岐: BC 600 年 - 999 年、
- (3) 情報と物語: 1000 年 - 1599 年、
- (4) 技術と情報: 1600 年 - 1839 年、
- (5) 情報の拡大: 1840 年 - 1899 年、
- (6) 戦争と情報: 1900 年 - 1939 年、
- (7) 情報の文化: 1940 年 - 1999 年。

まず各部分ごとの冒頭で、その区分の特徴づけを一枚のダイアグラムで示している。それから見開き二頁でその時代区分全体の論評がある。後は細かい年代別の記述になる。最初は千年あるいは百年きざみから、だんだん十年きざ

みくらいになって、近代以降は一年きざみで見開き二頁で書いている。横軸方向に五種類のテーマを掲げて、縦軸方の時間の流れと組み合わせた二次元配置である。横軸に取り上げるテーマは、それぞれの頁ごとに異なっている。重要なキーワードは縦書きで枠に囲んで配置している。また色情報を用いて、個々の内容の分類を表すように工夫している。

実は私の手元には 1989 年までを

扱った初版本(1992)と、1995 年までを含めてある増補版 4 刷(2001)の二冊がある。前者は、研究室の学生たちといっしょに松岡正剛さんを編集工学研究所に訪れたとき、松岡さんからいただいたものである(お返しに私のパズル書を所望された)。後者は、研究室の院生のひとりが修論でメディア論を展開する際に必要になって、あらためて購入した。もしかすると、さらに新しい情報を含めた増補版が出ているかもしれない。

年表の作成は、かなりの労力を必要とする。個々の事例を収集し、時系列に沿って配置し、取捨選択し、簡明直載に記述する。項目をどう配置し、どう記述するかには、編者の歴史観がそのまま反映する。私自身も『NEWTON』誌の編集部から依頼を受けて「コンピュータ歴史年表」を作ったことがある[2]。これは本ではなく A1 版の一枚のボ

松岡正剛監修、編集工学研究所構成  
『情報の歴史』



写真上より、  
情報処理学会編『日本のコンピュータの歴史』オーム社、1986年。

松岡正剛監修、編集工学研究所構成  
『情報の歴史 象形文字から人工知能まで』  
NTT出版、1992年、  
同上・増補版1996年。

なお、『情報の歴史 象形文字から人工知能まで』は通常版、増補版とともに絶版となっている。  
湘南藤沢メディアセンターの請求番号は、通常版が007.2@JO1@1、増補版が007.2@JO1@1-2ed

スターだから、ひとりで作ることができた。当時、情報処理学会の歴史特別委員会の幹事を務めていたことから、私は依頼があったものと想像している。コンピュータと対象を限っているからバベッジの解析機関から始めて、エッカートとモークリーのENIAC、IBM360などから、オブジェクト指向言語に至る。当時はまだインターネットは存在せず、村井純さんたちのIINET実験開始（1984）を最新の話題のひとつにあげていた。

別の科学史の年表として、東京電力の広報誌『ILLUME』の付録のA2版のポスターとして、20世紀の科学の主要な発見を二次元に関連づけたもの<sup>[3]</sup>が手元にある。これは東大のグループが作成したもので、キーワードだけを色分けして配置している。

こうした例と比べて、『情報の歴史』はずつと中身が濃く、作制に要した労力も相当なものだったことが推測できる。ひとつだけ注文すれば、索引がないことが不便である。この本で何かを検索したいとき、おぼろげな記憶を頼りに、パラバラと頁を繰るしかない。いつぞこの本をネットに載せたらと考へても、もともと本の形を前提に制作した内容を、機械的にウエブページに載せるときには、そのように編集しなおす必要があり、本書については簡単にはできない。

- なお、初期のコンピュータの歴史については、慶應義塾大学理工学部名誉教授の大駒誠一さんの著書<sup>[4]</sup>が詳しく述べている。また、日本のコンピュータの歴史については、情報処理学会が出した本<sup>[5]</sup>にまとめられている。どちらも、本書と合わせて座右に置きたい本である。
- 【参考文献】
- [1] 松岡正剛監修、編集工学研究所構成『情報の歴史 象形文字から人工知能まで』NTT出版、1992年、増刷版4刷、2001年。
  - [2] 有澤誠監修「コンピュータの歴史」『Newton』第7巻第4号付録、教育出版社、1987年4月。
  - [3] 阿部豊、小林昭子、酒井英行、馳澤盛一郎共監修「20世紀に起きた科学の主要な発見・発明とその関連図」『ILLUME』第10巻第2号(通巻20号)付録、東京電力、1998年11月。
  - [4] 大駒誠『コンピュータ開発史』共立出版、2005年。
  - [5] 情報処理学会編『日本のコンピュータの歴史』オーム社、1986年。(この本は1960年以前を扱っている。1960-70年代に関する統編が出ており、1980-90年代の三冊目の企画を現在練っていると聞く。)



有澤 誠（ありさわ・まこと）  
環境情報学部教授兼政策・メディア研究科委員。  
東京大学工学部卒。スタンフォード大学修士課程修了。工学博士。  
専門はコンピュータ科学、コンテンツ工学。  
担当科目は、モデリングシミュレーション入門、情報数学Ⅰなど。

# SFC検証

File 09 : SFCの広報  
～受験生向けパンフレットから読み解く



慶應義塾大学 淡路  
総合政策学部

1990年4月開設

2006年、大学入試センター志願者数が前年に比べて3.3%落ち込んだ。全国の大学・短期大学の三分の一は定員割れを起こしている。少子化が進むなか、大学による受験生確保の競争が激しさを増し、大学が学外から広報の専門家を招き入れることも珍しくなってきている。では、SFCの広報はどのように行なわれてきたのだろう？ 今回の「検証」では、注目する対象を受験生向けの広報パンフレットに限定して、SFC創設以来の広報活動を振り返ってみる。

なお、現在SFCは総合政策学部、環境情報学部、看護医学部、政策・メディア研究科、健康マネジメント研究科から構成されているわけであるが、ここでは、1990年のキャンパス創設時から存続している総合政策学部と環境情報学部の二学部のみを指して、便宜的に「SFC」という総称を用いることをお許しいただきたい。

■熱く語られた理念  
SFC設立当初の1990年に作られた受験生向けパンフレットが数部、事務室の倉庫に残っていた。表紙をめくるやいなや目に飛び込んできたのは、「若者は未来からの留学生」という名文句だ。これほど鮮明に未来志向を打ち出したのは、当時画期的なことだったといえよう。

とはいっても、現在のものよりもかなり分厚くて45ページにも及ぶこの冊子は、その内容の実に三分の一以上を慶應義塾大学全体のアピールに割いている。SFCの広報は、「SFCは慶應義塾である」と受験生に認識させること、慶應義塾の一翼を担うキャンパスとしてのSFCの認知度を高めることを、まず目指したようだ。

この受験生向けパンフレットが作成された当時、新設のSFCに具体的な教育実績はなかった。それは将来に向けて構築していくべきものであった。また、キャンパス自体の物理的環境もまだ整っていないかった。なにしろ、校舎も完成していないなかった。当然、キャンパスの写真など存在しない。代わりに受験生に提示されているのは、立体模型図と完成予想図である。SFCはまさに未知の可能性を秘めたフロンティアだったわけだ。創設者たちはフロンティアの開拓者のごとく、新しい大学の理想とコンセプトを熱く

●広報委員会…慶應義塾大学の学部の学生募集に関する業務を扱う。受験生に向けた広報活動の本部である。

■広報組織（慶應義塾全体）

●入学センター…慶應義塾大学の学部の学生募集に関する業務を扱う。受験生に向けた広報活動の本部組織。三田キャンパスに設置されている。

■総合政策学部・環境情報学部の広報に関する部署

●広報委員会…広報活動の意思決定機関。7年前の1999年に「広報・国際交流委員会」として創設され、2006年9月現在は「広報委員会」として総・環両学部の学部長、政策・メディア研究科委員長および教員5名で構成されている。

SFCのウェブサイトに掲載されている「卒業生の活躍」（06年3月開始）、「研究の現場」（04年4月開始）、「おかしら日記」（04年4月開始）等の連載はいずれも、広報委員会が考案し、実現した。なお、本誌KEIO SFC REVIEWのかつての連載記事がこうしたウェブ連載のアイデアの源となつたケースもあることを特筆

SFC広報を読み解く用語集

語った。「人間と環境」「情報と情報技術能力」「総合的判断」「グローバルな視座」と視野「創造性」——この4つが、当時のSFCのキーワードであったのだ。

説明文の中は、「CAMPUS Network System)」「マントンハイツ(外国語)」といった用語も掲げられてる。現

在ではこのように生のボキャブリーの中に完全に定着してしまった言葉だが、当時の受験生にとっては聞きなれない言葉だつたに違いない。更には、その如実に時代の差を感じさせてくれるのは、このパンフレットでは、「インターネット」が「ティバトル系基幹ネットワーク」と称せられていたことだ。まだ一般に普及していないかったインターネットをインフラとして採用したのが、受験生にとって正真正銘「新しさ」大歓迎だったに違ない。

「ver2.0」という名称を考えたのは、佐藤雅彦環境情報学部教授(当時。現東京藝術大学教授・慶應義塾大学環境情報学部特別招聘教授)である。当時広報国際交流委員会の委員長だった現環境情報学部長の富田勝教授が「本当に大きな改革だから、イメージを刷新すべき言葉を考えてほしい」と、同委員だった佐藤教授に依頼したのだった。(広報委員に関しては下段の用語集を参照)

変わった。

「ver2.0」という名前が、SFCの教育が従来の大学教育とは違う、まったく新しいものなんだということをアピールする必要があったのです。しかし、10年が経ち、多くの大学がそうしたことを当然のこととして捉えるようになりました。インternet外國語教育、AO入試、文理融合なども、SFC独自の教育理念である。SFCがそうしたことも普及しましたね。だから、その五つの柱を『他大学、また慶應義塾の他学部にも類を見ない、SFC独自の理念である』とわざわざ掲げる必要がなくなつたんです。

■さわりに先く……

2000年5月発行の受験生向けパンフレットを見ても、まだ「氣がつくのは、設立当初のパンフレットに掲載されていた「五つの柱」が姿を消し、三つのテーマ——「基礎積み上げ型」教育の限界」「SFCのプロジェクト中心カリキュラム」「次世代に求められる人材像」——に変わってしまった。ではなぜ、「柱の柱」の記述はなくな



■設立10年の改革  
「この柱の柱」次の段階に入りました。」  
「SFC Version 2.0」——N0000年

5月に発行された受験生向けパンフレットの表紙は、この記載でした。「この

Over 2.0」とは、設立10周年を迎えた時に断行された改革の総称ですね。

当時の改革の一環として、カリキュラムの大大幅な改定が行われた。受験生向

けパンフレットも、新カリキュラム編成を紹介すべく、新しい内容とスタイルに

変わった。

柱として掲げて、SFCの教育が従来の大学教育とは違う、まったく新しいものなんだということをアピールする必要があったのです。しかし、10年が経ち、多くの大学がそうしたことを当然のこととして捉えるようになりました。インテルネット外國語教育、AO入試、文理融合なども、SFC独自の教育理念である。SFCがそうしたことも普及しましたね。だから、その五つの柱を『他大学、また慶應義塾の他学部にも類を見ない、SFC独自の理念である』とわざわざ掲げる必要がなくつたのか。この点に関しては、畠田勝教授は次のようく述べます。「理念のものに変化があったのではないか。」

「10年の間に5つの柱の理念が自明のものになってきたからです。SFCが創立した当初は、『グローバルな視座』や『創造性重視』といったことを理念とする大学はなかった。だからこそ、これを

勝教授は次のようく述べます。「理念のものに変化があったのではないか。」

「10年の間に5つの柱の理念が自明のものになってきたからです。SFCが創立した当初は、『グローバルな視座』や『創造性重視』といったことを理念とする大学はなかった。だからこそ、これを

してね。

●学事(AO)担当…AO=Aシミシニアズ・オフィス。オープンキャンパスや試験日程の告知なども含め、主に各種入学試験についての広報を行なう。

●湘南藤沢研究支援センター…SFCでの研究活動に関する、塾内外からの助

成金・補助金の申請・交付等の支援を行なつて。また、SFC研究所の事務局としては、産官学連携による教託・共同研究の取りまとめ、運営サポートなどを行なつ。また、SFC研究所の広報も担当している。広報活動は主として、教員の研究内容や成果に関するもので、メディアに向けての情報発信や広報ツール製作を行なう。広報活動は主として、教員の研究チーンを支援している。また、SFCの研究発表イベントであるORF(SFC Open Research Forum)の事務局としても機能して。

●総務(広報)担当…SFCには広報「課なるものは存在しない。」この部署が広報全般を扱つている。HPサイトのシステム管理をはじめ、広報一般の業務を担当しており、広報委員会のサポートも行なつて。●「問題発見・解決型」教育のアピール  
「ver2.0」の受験生向けパンフレットで目を惹くやつ一つの点は、「問題発見・解決型」という言葉が、あらゆる柱の柱で、くじらくじらと繰り返されてしまう。同じ言葉が何度も繰り返して記載されてしまふという印象はなかつた。SFCの教育理念のなかでも最も重要なものとして、「問題発見・解決型」ということを

して、「問題発見・解決型」ということを受験生に向けて強くアピールする必要が、以前にもまして感じられていたことの反映かもしない。

### ■ニーズに応える広報へ

すでに述べたように、SFC創設期に作成された広報パンフレットは、キャンパス創設の意図と中心理念を前面に提示していた。「ver2.0」以後のパンフレットでは、その内容がより具体的なものに進化した。「理念もすばらしいし、キャンパスの設備も充実していることはよく分かった。しかし、何を学んでいるのか、どんな研究をしてるのかがよく見えていた」「ver2.0以前の学部説明会では、このような質問が出たことが多い」と富田教授は語る。「研究プロジェクトが学習の中心」と言われても具体的にどんな研究プロジェクトがあるって、どんなことをしているんですか?」とよく問われたのです。その疑問に答えるべく、パンフレットでは具体的に研究プロジェクトを紹介するようになりました。

2000年5月発行の受験生向けパンフレットには15のクラスターを一つずつ解説したページがあり、そこに属する研究プロジェクトと研究テーマを写真入りで紹介している。各研究プロジェクトの紹介では、教授へのインタビューだけでなく、実際にそこで学ぶ学生へのイ



ンタビューも掲載されている。また、下段には「履修ガイドライン」とそのクラスターの研究プロジェクトで学ぶにあたって重要なと思われる科目一覧が掲載され、受験生が入学後の学習や研究を非常に具体的にイメージしやすいようになつていて、受験生用パンフレットは、主に理念を謳うものから、受験者の知りたい情報をに対応するものに進化したともいえるだろう。但し、その反面で、クラスターが履修ガイドライン以上の大きな意味を持つているかのような印象を与える点に、在学生としては違和感を覚える。

ver2.0の受験生用パンフレットからは、一つの大きな空間としてのSFCの一体感が今ひとつ伝わっていない。計15の「クラスター」という名の専門のセクションに分割されてしまっているかのようない——事実に反する——印象を受けるのである。

数が圧倒的に多い。

それでは、SFCが新しくなったパンフレットで受験生に最も強くアピールしようとしていることは何なのだろうか。富田教授は言う。「いちばん伝えたいのは、先端的な研究プロジェクトを実践し、教員や仲間とともに試行錯誤するプロセスこそが真の大學生教育だ、ということです。これまでSFCは他の大学に先駆けてAO入試や文理融合を取り入れてきました。これらは今、多くの大学に導入さ

■より具体的になった  
新パンフレット

そして今、SFCの受験生向けパンフレットは、2007年度から始まる新たな「未来創造カリキュラム」(これについては本誌次号で特集を組む予定!)に合わせて刷新され、第3期に突入したといえる。2007年度版の表紙をめくつてみると、冒頭、総合政策学部と環境情報学部のカリキュラムの特徴、新カリキュラムの全体像が、「未来を創る先導者を育成する」という理念的な文言とともに記されている。続いて、2学部合わせて70ものプロジェクトの提示があり、さらに各学部三つの研究会の学生および教員によるメッセージなしコメントが掲載されている。ver2.0のパンフレットに比べ、紹介されている研究会の数が圧倒的に多い。

それでは、SFCが新しくなったパンフレットで受験生に最も強くアピールしようとしていることは何なのだろうか。富田教授は言う。「いちばん伝えたいのは、先端的な研究プロジェクトを実践し、教員や仲間とともに試行錯誤するプロセスこそが真の大學生教育だ、ということです。これまでSFCは他の大学に先駆けてAO入試や文理融合を取り入れてきました。これらは今、多くの大学に導入さ

### ■広報媒体

●各種パンフレット：今回取り上げた受験生向けのほかに、今年度、総合案内のパンフレットが作成される予定。

●ビデオ：SFCのカリキュラム、キャンパスライフ、設備等を紹介したビデオ。オープンキャンパスで上映されるほか、高等学校等に配布され、進路指導部などで資料として閲覧される。現在使用されているは2002年に作成されたものだが、今年度、新しいものが作成される予定である。

●オフィシャル・ウェブサイト…SFCのウェブサイトは学生や教職員向けへの事務的連絡を掲載しているだけではなく、受験生、企業、研究者、卒業生へ向けた情報発信も行なつており、広報活動の一環である。

ウェブサイトの中心に位置する「ニュース」欄には、SFC事務室の各部署から直接アクセスすることが可能だ。各部署の担当者が、キャンパス全体に、また学外の社会に向けても伝えるに値するような事実に気がついたなら、すぐさま自らの責任においてそのニュースを直接アップロードすることができる。インフラ管理を行なっているのは総務担当(広報)だが、その広報担当者の許可を得たなければオフィシャルサイトにニュースの

れ、一般化してきています。SFCがいち早く挑戦したことがSFCの外でも普及したのは誇るべることだと思います。では、現時点で、SFCにあって他大学ないものは何でしょうか。それが研究会中心型の教育なのです。

本気で学びたいことを見つけ、熱中して研究に打ち込めるのがSFCなんだ、ということを伝えたのです。

SFC広報の担当者によれば、広報戦略において留意していることが二つあるという。一つはAO入試の受験者同様に「SFCが大好き！」という一般受験生や慶應義塾内進学生を増やすこと。つまり、SFCの理念と研究・教育実践への共感者を増やすことである。

もう一つの留意点が興味深い。受験年齢の若者の視野の中にある領域問題・キーワードに対応するようなプレゼンテーションをSFCの側から行なう必要だと考えているというのだ。たとえば、高校生や予備校生が大学や学部を探すとき、関心のある言葉で検索したところSFCがヒットした、ということが起こらなければならぬ。実際、そうした配慮からの努力なのであろう、2007年度版の受験生用冊子はVer2.0のそれよりも研究・教育内容をより具体的に、より分かりやすい言葉で説明している。一時期、科目名やクラスター名

にカタカナを多用し、ネーミングで新华社をアピールする傾向もあったSFCだが、これからは「コミュニケーショーンの「中身で勝負する」意気込みである。

## SFC広報のこれから

最後に、これからSFCの広報にどんな課題があるか、富田教授に聞いた。

「SFCのイメージアップを図るのも大事ですが、ありのままのSFCをもっと皆に知つてもらいたい。今の段階では、国内外の日本人にまだSFCの良さがきちんと理解されるまでには至つていないと私は思います。これが最大の課題ですね。慶應義塾の中でもSFCだけが9月入学のための海外外出願のできる学部なのですから、これからはグローバルなアピールにも力を入れていきたい。マスメディアに對しては特に戦略を立てて広報を行なっているわけではありません。教員や学生、卒業生が活躍して、その結果ポジティブな口コミ情報が多く流れれるという現実に至ることが目標になるでしょう。在学生の皆さんにも、自分の出身高校等でSFCの良さを広めてください。そして、広報戦略の良いアイデアがあつたら、学生の皆さんからもぜひ教えてもらいたいと思っています」。

(文責:KEIO SFC REVIEW編集委員)  
—を先取る広報へと歩を進めていくことだわ。

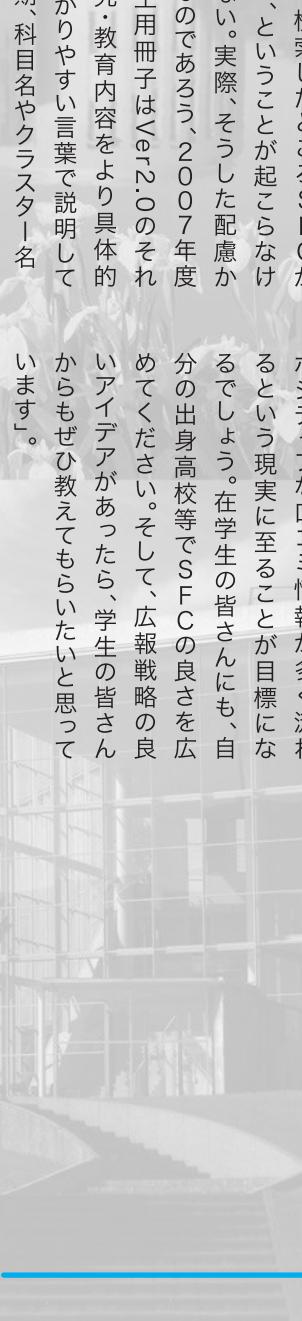
SFCの広報は、動き出したばかりである。SFCに広報委員会が設置されているとはいっても、具体的な戦略が実践に移されるのはこれからなのだ。未来を先導するSFCは、受験者のニーズに応える広報をも超えて、二

掲載ができない、といった仕組みではないのだ。「広報担当だけが広報活動を行なうのではなく、皆で広報に携わるという形で広報に携わるといふ姿勢が、他キャンパスにはないSFCにおける広報の特色です」とのいふのである。

<http://www.sfc.keio.ac.jp/>

## 【参考文献】

- ・未来を創る大学 慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス(SFC)挑戦の軌跡  
孫福弘・小島朋之・熊坂賢次 編著  
慶應義塾大学出版会(2003)
- ・早稲田大学WASEDA REPORT  
2006年度学部入試志願者の動向  
[http://www.wasedajp.jp/journal/pdf/0606\\_04.pdf](http://www.wasedajp.jp/journal/pdf/0606_04.pdf)



# SFCのこれからを考える

第9回 若手教員に聞く 内藤泰宏

(環境情報学部助教授兼政策・メディア研究科委員)

## 健全の尊さ、健全なSFC

これまで幾度となく語られてきた「SFCらしさ」や「これからのSFC像」—それらを分析し、SFCのこれからを語るための新鮮な視点を提示する。今回は内藤泰宏環境情報学部助教授に話を聞いた。



—SFCに着任された経緯を教えてください

ぼくは今、バイオインフオマティクスを専門としていますが、大学は浜松医科大学医学部を卒業して医師免許を取得しています。その後、基礎医学を研究するために大学院へ進み、さらに、東京大学医科学研究所へ移って研究を続けました。医学・生物学は、いわゆる「理系」のなかでも最近になって近代化された学問で、理路整然と理解されていないことが山積みの領域です。一個の細胞について理解することでさえ大変なのに、約60兆個の細胞で成り立っているヒトという生物をまるごと理解する道のりは果てしなく遠い。このまま漫然と研究を続けても、生きているうちに

はその答えに辿り着かないと感じました。そう考えていた頃、富田さんがSFCでバイオインフオマティクスという新しい情報科学を

使った、生物全体についての研究を試みていることを知りました。その研究に大変興味を持ち、自分もぜひ参加させてほしいと思い、SFCの教員募集に応募しました。

ぼくのように、医学部を卒業して医者（臨床医）にならない人はそもそも少ない。医学研究で所属した研究室は、ぼく以外に医学部卒業者のいない理学系の研究室で、医学部からそんな研究室に行く人はさらに稀少です。そこからさらに情報科学の研究に移る人はほとんどいません。世界中探しても、似たような選択をして人生を歩んでいる人はほとんどいないと思います。前例のない道を、信じるままに選びとつてこられたこと、その結果として居場所が与えられていることを幸せだと感じています。

—SFCに對してどのような印象をもつてありますか？

一言でいうと、「健全」。SFCは大学という組織がこうあるべきだと考えられる方向に向けてスタッフが協力している場所です。SFCに赴任して感じたことの一つは、職員と教員が連携して組織を機能させていることです。事務職員が教員たちをいろいろな面からサポートしてくれます。学生のみなさんにとって

は当たり前だと感じるかもしれません、そうした当たり前のようなことが当たり前に実践されていない組織は案外多いものです。SFCは授業や研究を行なう教員とそれに対する職員の積極的な協働によって、相対的には「健全」な大学運営を行なっていると思います。もう一つは、教職員の間で非常に活発な議論がなされることです。SFCには職位に関係なく全教員が参加できる会議があ

て、活発に議論が交わされます。SFCの将来を考える大事な会議に誰もが参加でき、誰の発言にもしっかりと耳を傾けてくれる。

こうした仕組みがあり、しかも機能しているキャンパスはなかなかないと思います。こうした方がいいと思っていても、それを実践することは難しい。SFCは、当たり前のこと、こうした方がいいと思うことを、ちゃんとやろうとするし、やれるそういう意味で、SFCはとても健全だと思ふし、とても好きですね。

SFCに對する「健全」だという印象は、SFCに来てからの6年間、大筋では変わっていません。しかし、今、SFCは大きく変化する時機にさしかかっていると感じています。現実にも、SFCの教員の顔ぶれは大きく入れ替わりつつあります。SFC設立の中心となつて活躍された教員の多くがすでにキャンパスを去られており、さらに今後5年といつたスパンで、SFCの草創期を支えた教員が数多く定

年を迎えられます。同時に、それと入れ替わるよう、塾外で活躍し実績を積んだSFCの卒業生たちが教員としてキャンパスに還ってきています。還ってきた若い世代の教員たちは、SFCをとても愛しているし、SFCのこれからについてとても熱心に考えています。こうした熱意は、間違いなくSFCを次のステップへと推し進める力になると感じますし、ぼく自身も触発されるものがあります。

### ——そんな変化の時機を迎えたSFCで、どんな取り組みが始まっているのでしょうか。

現在、カリキュラムを改訂するための膨大な議論と作業に、多くの同僚と取り組んでいます。その準備のために若手教員を中心には「特命委員会」が組織され、昨年の夏休みに合宿を行なったのが関わりはじめです。合宿で出したアイデアを発展させて今年実施された一つが、4月のガイダンス期間中にキャンパス内にポスターを展示するという試みです。新入生に自らの魅力をアピールしなければという考え方であります。多くの学生は入学後すぐにサークルやバイトを始めますよね。なのに研究会に入るのは2年生以降です

から、サークルやバイトで埋まらない時間にしか研究会は入り込めていないのではないかと考えました。そこで、特命委員会では、学生に研究や勉強にアクティブになってもらう必要があると考えました。来年度からは実際に研究会で行なわれている研究を、新入生も可能なかたちで、体験できる科目も用意される方で議論が進んでいます。

### ——そんななかで、内藤先生ご自身の取り組みはどのようなものでしょうか。

2007年に入学する学生から、卒業プロジェクトが必修になります。必修になると研究会に入る学生が増え、規模も大きくなるでしょう。研究室の組織をよくオーガナイズし、多くの学生が楽しく学べる場をつくり、維持しなければなりません。一緒に研究する学生がハッピーでなければ研究会の価値も激減してしまいますから、そこをどうするか試行錯誤しています。現在は、学生と「ミニ二ケート」ができる状況をできるだけ多くつくりだすことに重点を置いています。ぼくは講義や会議の時間以外は、ほぼ100%共同研究室で学



内藤 泰宏

(ないとう・やすひろ)

環境情報学部助教授兼政策・メディア研究科委員。

1998年浜松医科大学大学院博士課程を修了。博士(医学)。東京大学医科研究所博士研究員等を経て、2000年よりSFCへ。2005年より現職。先端生命科学研究所助教授を兼任。専門はシステム生物学、バイオインフォマティクス。「進化遺伝学」「バイオシミュレーション実習」等の授業を担当。

### ——最後に学生へのメッセージをお願いします。

ぼくは医学部を出ても医者にならず、挙げ句の果てに情報科学を駆使して生命科学の研究に取り組むという、もの珍しい道を歩んでいます。ただ、これは決して単なるあまりやくではなく、直面したさまざまな局面で自分がより楽しむことができ、幸せになれる選択はどれかと考えてきた結果です。ぼくは

生と机を並べて過ごしています。個人の教員室にいることはほとんどありません。共同研究室でぼくを捕まえてくれれば、学生と話すことをできるかぎり最大限優先しています。というのも、鶴岡タウンキャンパスの立ち上げのために山形県で暮らした3年間、遠隔会議システムなどを駆使して努力はしたもの。SFCを本拠とする学生とは充分にコミュニケーションできたとは到底思えなかつたからです。当時の学生に対しては、今も申し訳ないです。気持ちが残っています。それにもちろん、学生に教えられること、刺激を受けることも数多くあります。学生との間に研究上のパートナーとして関係を築くことが、楽しい研究会の基盤になると 생각ています。

自分のためにしてきた選択の一つひとつ理由を、自分のことばで答える自信があります。今、世間には大学生活や就職活動についてのモデルコースが山ほど出回っています。それは平均的で安全なキャリアパスかもしれない。そういった他の者の価値基準に自分をあてはめ、委ねることはラクチンでしょう。考えることは確かに疲れるし、自分の出した答えが正しいかどうかを確かめる手だてもあります。しかし、世間が与えてくれるスタンダードは、あなたにとって本当にスタンダードでしょうか? 最大公約数としての「安全」なコースに乗ったからといって、必ず幸せになれる保証はありません。あなたは、ほかに同じ人間は誰ひとりとしていない個人です。歴史上いまここにひとりしかいない自分にとって、何がいちばん幸せなのかは、おそらくあなたの自身にしかわからないことです。あなたをいちばん大事にできるのはあなた自身です。メッセージをといふのであれば、自分の幸せについて自分の頭を振りしほて考え方抜いていますか、と問いたいですね。

# KEIO SFC REVIEW No.31

## 編集長

馬 越 初 美（総合政策学部3年）

## 副編集長

隈田原幸大（環境情報学部2年）

坂 本 茜（環境情報学部2年）

## 編集委員

朝 倉 麻 衣（総合政策学部4年）

百 谷 伶 奈（総合政策学部4年）

藤 山 奈 月（総合政策学部4年）

田 村 佳 菜（環境情報学部4年）

小野島茉莉（総合政策学部3年）

佐々木綾香（総合政策学部3年）

田 中 康 範（総合政策学部3年）

西 浦 華 織（総合政策学部3年）

石関美実子（環境情報学部3年）

小 杉 崇 文（環境情報学部3年）

柴 光 則（総合政策学部1年）

松 原 真 倫（総合政策学部1年）

河野佐和子（環境情報学部1年）

田 中 舞（環境情報学部1年）

力 石 大 輔（環境情報学部1年）

## 付録 模型

HAL-CURATION

（稻葉佳之+坂口祐）

## 湘南藤沢学会

KEIO SFC REVIEW担当

堀 茂樹（総合政策学部教授）

## 事務局

田坂 真美

## 編集後記

長い文章、硬い文章、難しい文章……これらは大抵の場合、嫌われ者の立場にある。けれども、「読むのは少しきついが面白い」という感覚を一度味わうと、単に「楽に読める」だけの文章では物足りなくなる。SFC REVIEWを通してその感覚を多少でも味わってもらえば嬉しい。「メディアが変わる、メディアが変える」——今号の特集も、とっつきやすそうなタイトルとは裏腹に、専門的な話や専門用語が頻出するので、「楽に読める」とは言い難いかもしれない。しかしながら、ふだんから親しんでいるメディアのことだからこそ、いつもとは違う視点からそれを見ることに楽しさを見出してもらえたなら幸いである。

私たちが夏休みを返上し、手塩にかけ一生懸命育ててきたこのSFC REVIEW31号も、いったん発刊されたらもはや私たちのものではなくなる。世の中に出たら、読者のものだ。ぜひ可愛がってやってほしいと、祈るばかりである。

最後に、私たちの取材に丁寧に応じてくださった皆様、本誌に欠かせない存在であるワキプリントピアの皆様、いつもサポートし続けてくれる堀先生、事務局の田坂さん、そして、共に本誌を作り上げてくれた編集委員のみんなに、心からのお礼を申し上げる。特に、副編集長の二人にはお世話になった。二人がいなかつたら、今号の完成はなかっただろう。私を最後まで支え続けてくれたことに、深く感謝したい。

31号編集長 馬越 初美

KEIO SFC REVIEWは  
編集委員を募集しています。

雑誌記事の編集、レイアウト、校正、写真に  
興味のある方は一緒にKEIO SFC REVIEW  
を作りませんか？

MAIL  gakkai@sfc.keio.ac.jp



2006年11月30日 発行

発行人 徳田 英幸

発行所 慶應義塾大学 湘南藤沢学会

〒252-0816 神奈川県 藤沢市遠藤5322

Tel 0466-49-3437

<http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/>

gakkai@sfc.keio.ac.jp

最新号およびバックナンバーを  
ご希望の方はご連絡ください。

現在販売している号は、第6号および

第18号～最新号（31号）です。

詳しくは、湘南藤沢学会ホームページ

<http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/>を

ご覧いただか、もしくは事務局までご連絡ください。

制作・印刷 株式会社ワキプリントピア

〒252-0815 神奈川県 藤沢市石川6-26-19

Tel 0466-87-5811

Fax 0466-88-6560

<http://www.printpia.co.jp/>

■ 無断転載・複製を禁じます。

ご相談は慶應義塾大学 湘南藤沢学会までお寄せください。

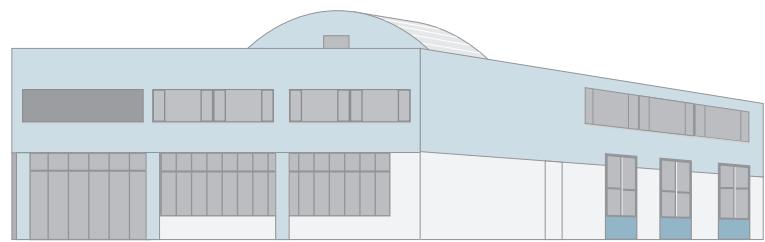
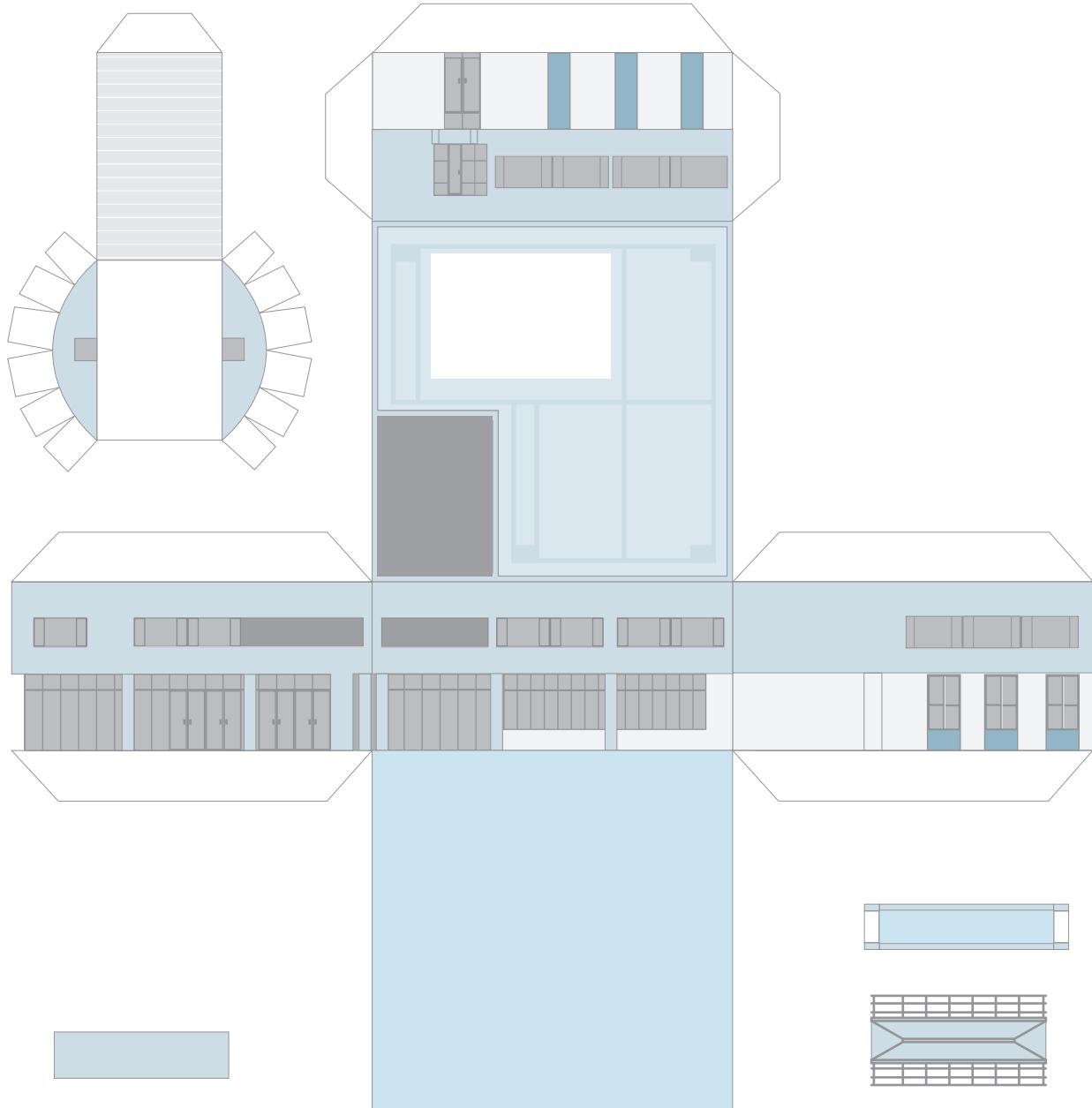
TEL ☎ 0466-49-3437

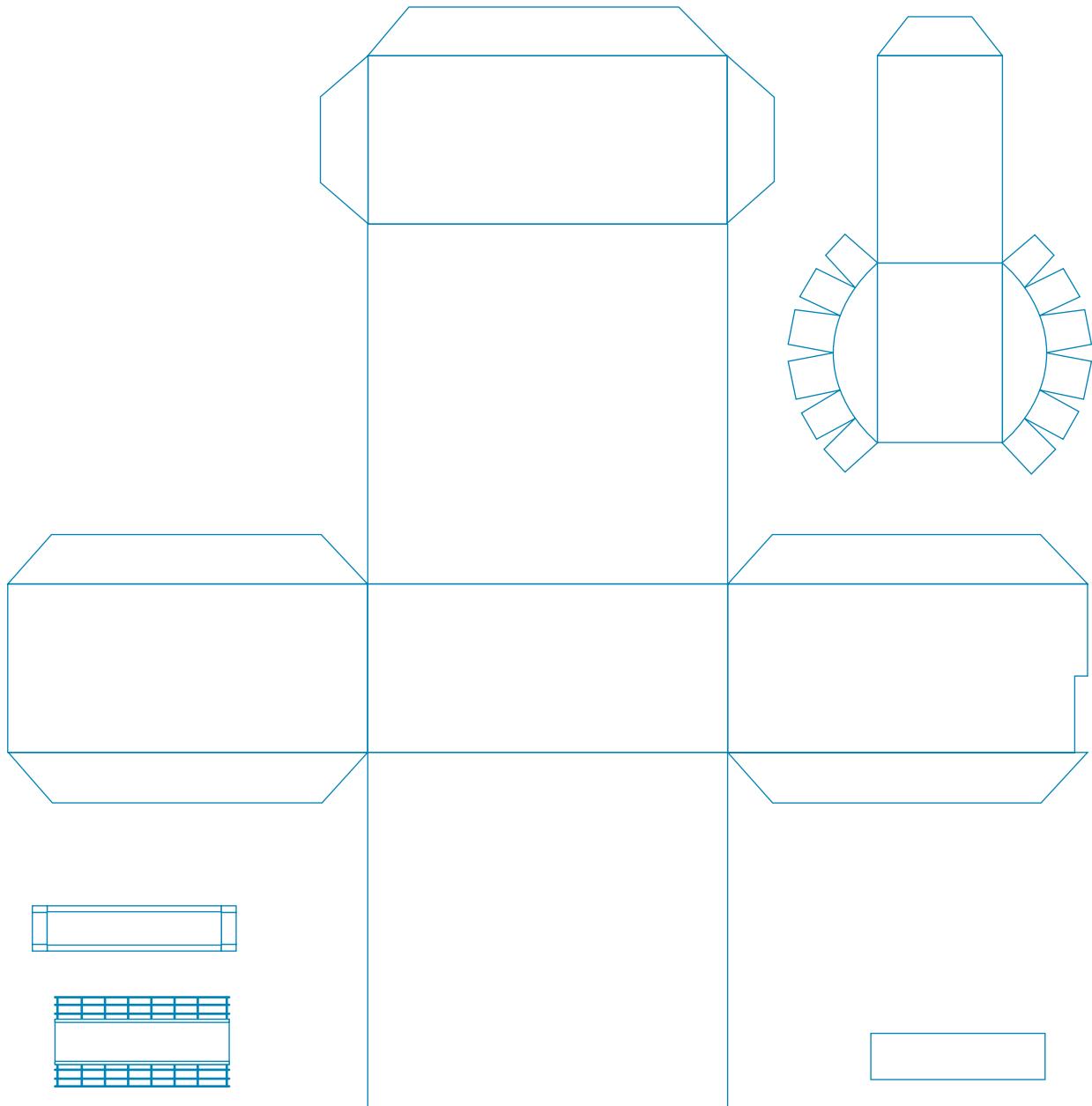
FAX ☎ 0466-49-3594

MAIL  gakkai@sfc.keio.ac.jp

# make your campus

21 ラムダ館







**KEIO SFC REVIEW No.31**

**湘南藤沢学会 2006.11.30**

**ISSN 1343-3318 定価 300円(消費税込)**